２０２４年度
神戸山手女子高等学校　入学試験
（１次）

国　語

・試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

・試験時間は 50 分です。

・解答用紙は、この問題冊子の中央にはさまれています。

・試験のはじめに、受験番号を解答用紙に記入しなさい。
（氏名を書いてはいけません。）

・解答用紙の □ の採点欄には、何も書いてはいけません。

・解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。

・字数制限のある問いでは、句読点や記号も一字と数えます。

・質問などがあれば、静かに手をあげて知らせなさい。

受 験 番 号			

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

本日は「生きる力を高める」「いのちの力を高める」というテーマでお話しします。

もし僕が君たちくらいのⓐネンレイであれば、今後世界はどうなってしまうんだろうか、この社会の仕組みはいつまで続くのか、近いうちに破局的な事態が到来するんじゃないか、と不安を感じるに違いありません。自分がいま学校でやっている勉強は本当に生きる上で役に立つのか、自分が勝手に思い描いている※1キャリアパスは二〇年後も有効なのか。さっぱり見通しが立たない時代。

でも、実はいつの時代だって、①事情は同じなんです。いつでも先の見通しなんかさっぱり立たなかった。よく高度成長期は未来に希望があって、社会全体が明るかったと、言う人がいますが、そんなのまるで嘘です。当時だって、先の見通しが立たない点では いまと少しも変わらなかった。高度成長は一九五〇年代の終わり頃に始まります。僕が小学校の終わりから中学校に入る頃です。だから、時代の空気をよく覚えています。その時代のベースにあった空気はかなり暗鬱なものでした。すごく暗かった。

なぜ暗かったのか。それは米ソ核戦争がいつあるか予測が立たなかったからです。六〇年前後というのは東西冷戦、米ソの二大超軍事大国がお互いに核ミサイルを持ってにらみ合っていました。六二年のキューバ危機のときは第三次世界大戦開戦直前まで行ったのです。日本は敗戦国でしたので国際政治に関与できるような国力がありませんでした。日本の一般国民が何を思おうと、何をしようと、それによって核戦争の勃発を食い止めることなんかできない。原水爆実験がつぎつぎに行われ、雨が降るたびに核実験で放出された放射性物質が日本人の頭上にも容赦なく降り注ぎました。そういう時代でした。日本だけではありません、②五〇年代末から六〇年代にかけて、世界中のどこの国の人たちも同じように、深い無力感に蝕まれていたのです。

③ＳＦというジャンルがその頃誕生しました。人類が自分で創り出したテクノロジーによって滅びる可能性が切迫してきたのに、その虚無感と恐怖を描き出す文学形式がそれまで存在しなかったので、ＳＦはそのために発明された新しい文学ジャンルでした。ですから、その頃核戦争で人類が滅びる物語がいくつも映画化されました。スタンリー・キューブリックの『博士の異常な愛情』（六四年）、スタンリー・クレイマーの『渚にて』（五九年）を見ると、人間が愚かにも地球を滅ぼしてしまうことの④リアリティがひしひしと伝わってきます。

キューバ危機以後、東西の歩み寄りがあり、少し平和な時代が来たかに思えました。【　Ａ　】、今度は一九六七年ごろから世界中で同時多発的に革命闘争が起きました。僕が高校生から大学生の頃のことです。（中略）日本でもほとんどの大学で全共闘が組織されて、全国学園紛争が拡がっていました。

そのような時代のことを「あの頃は未来が明るくて、良い時代だった」というふうにⓑ回顧する人間を僕はぜんぜん信用しません。僕は核戦争がいつ起きるかわからなかった時代に小学生、中学生時代を送り、社会制度が根本からⓒ覆されそうとしていた時代に高校生、大学生だった人間ですから、「先が見えなくて不安である」というのは、いわば僕にとっては「当たり前」のことです。いまに始まった話じゃない。

先が見えなくなったという点では、これが三回目ということになります。⑤そういう激動期には「こういう風に生きたら安全」という信頼できるサクセスモデルがありません。いつでも、そのときど

きの歴史的状況は人類にとってはじめて直面するものです。ですから、原理的に言えば、どんな時代のどんな社会にも「こういう風に生きていれば必ず成功します」というようなキャリアパスは存在しないのです。これまでも存在したことがないし、これからもない。成功の※2ロールモデルというものは存在しないのです。それは自分で見つけるしかありません。自分の生き方は自分で決める。失敗しても誰も恨まない。自分の判断力の足りなさを悔いるしかない。

でも、そう言い切るためには、いま世界で何が起きているのか、日本社会がどういうふうに構造化されていて、どうなろうとしているのか、それについての見通しを持つ必要があります。資本主義経済システムはどうなるのか、化石燃料が枯渇したあとエネルギーをどう手当てするのか、食糧危機や水不足が現実のものとなったときにどう生き延びるか、日本社会の人口が五〇〇〇万人減ったあとどういう社会制度を設計するのか、これらはいまから三〇年、五〇年後に君たちがまだ現役で働いている間に切迫する問題です。必ず、こういう問題に君たちは直面することがわかっている。そのためにいまからどういう備えをするべきか、それを君たちは最優先に考えなければいけない。

でも、そういうスケールで社会のことを語る人は残念ながらたぶん君たちのまわりにはほとんどいません。【　B　】、君たちは自分のポジションがわからない。自分が歴史的文脈のなかのどこにいて、どういう役割を期待されているのか、そういうことがわからない。

（中略）

グローバル人材とは何かについて劇作家の平田オリザさんが卓抜な表現をしていました。グローバル人材育成というのは「ユニクロのシンガポール支店の店長を創り出すための教育のことだ」と。なるほどと思いました。【　C　】、それがグローバル人材教育の具体的な達成目標なのです。英語ができて、タフなビジネスの交渉ができて、一日一五時間働けて、辞令一本で翌日から海外の支店や工場に赴任できて、何よりも低賃金を苦にしないこと。

いま日本の大学はそういう人間を毎年何十万単位で創り出すことを文科省と財界から命じられています。ですから、君たちがこれから大学で※3就活するとき、面接試験で必ずこう聞かれます。「あなたは今日辞令が出たら、明日から海外に行けますか？」これに即答で「イエス」と答えなければ、君たちは採用されません。

それでもいいと思っている人も中にはいるかも知れません。でも、よく考えてください。これはかなり悲惨な話ですよ。「辞令一本で明日から海外へ行っても構わない」という心の準備を君たちは大学に入ったらもう始めなければいけない。それはどういうことか。それは友人であれ恋人であれ家族であれ、あるいは地域共同体であれ、「あなたがいなくなると困る」というような人間関係を決して構築してはならないということだからです。そうですよね。「あなたがいなくなったら、とても困ります」と言う人が周りにひしめいていたら、海外になんか簡単に出られない。

でも、これっておかしくありませんか。僕は教育者として、子どもたちにはできることなら周囲の人から「あなたがいなくては生きていけない」と言われるような人になって欲しいと願っています。親族の中心であり、地域の中心であり、仲間たちのなくてはならない中心であるような人間に育って欲しい。それが教育者の願いです。グローバル人材育成教育というのは「そんな人間は要らない」ということです。家族たちの統合の要（かなめ）であり、地域共同体で祭礼の若頭をしていて、多くの友人に頼られている若者なんか、絶対にグローバル人材になれません。周りから［　　］と言われるような人間になるべく自己形成しなさい、そう命じてい

るのが「グローバル人材育成」です。日本社会はそういう人材を大量に要求しています。なぜでしょう。もちろん十分な理由があります。

（内田樹「学ぶということ」より一部改変）

※1　キャリアパス……個人が職業上の目標を達成するために進むべき道筋。

※2　ロールモデル……自分にとって、具体的な行動や考え方の模範となる人物のこと。

※3　就活……就職活動の略称。

問一　═══線ⓐ～ⓒについて、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二　本文の［に］と文法的に同じ種類の「に」を含む文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　準備したのに、上手くいかなかった。

い　朝起きて、すぐに出かける。

う　困ったことがあれば私に聞いてください。

え　お年寄りには親切に接する。

問三　【　A　】～【　C　】に入る言葉を、次の中から一つずつ選び記号で答えなさい。

あ　たしかに　　**い**　だから　　**う**　しかし　　**え**　そのため

問四　═══線①「事情は同じ」とありますが、どのような事情ですか。ふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　これから先の世界は、ますます悪くなってしまうという事情。

い　これから先の世界は、希望にあふれているという事情。

う　これから先の世界は、誰にでも予測可能であるという事情。

え　これから先の世界は、見通すことができないという事情。

問五　═══線②「五〇年代末から六〇年代」とありますが、この間に世の中で起こった出来事について、ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　高度成長

い　キューバ危機

う　東西冷戦

え　第三次世界大戦

お　原水爆実験

問六　═══線③「ＳＦ」が誕生したのはなぜですか。四十五字以内で説明しなさい。

問七　═══線④「リアリティ」と同じ意味の語句としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　現実性　　**い**　一貫性　　**う**　偶然性　　**え**　感受性

問八　――線⑤「そういう激動期には『こういう風に生きたら安全』という信頼できるサクセスモデルがありません」とありますが、では、どうすればよいと筆者は述べていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　歴史的な事実から他者の成功モデルを学び、忠実に真似をしようとする。

い　自分のおかれている状況を理解し、未来への見通しを持って、対応しようとする。

う　グローバル人材としての要求に応えるために、いつでも海外に赴任するという覚悟を持つ。

え　不確実性に対処するために、安定したキャリアパスを選択しようとする。

問九　□　にはどのような言葉が入るべきですか。自分で考えて答えなさい。

問十　筆者は、子どもたちにどのような人になってほしいと述べていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　長時間働けて、給料が低いことに対して文句を言わない人。

い　周囲の人たちの中心におり、必要とされる存在である人。

う　すぐに海外に行くことができるような、語学に優れた人。

え　周囲の人たちを頼りながら、感謝する心を忘れない人。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昭和初期の東京。朝倉先生は、青年たちを合宿させて短期間の講習を行う「友愛塾」を開き、第十期生を迎えた。朝倉先生を慕って上京した次郎は、この塾で助手を務めている。

コーン、コーン、――コーン、コーン。

凍りついたような冷たい空気をやぶって、板木（ばんぎ）が鳴りだした。そとはまだ、真っ暗である。白木綿（しろもめん）の、古ぼけたカーテンのすき間から、硝子戸（がらすど）ごしに、大きな星がまたたいているのが、はっきり次郎の眼（め）に映った。

かれは、あたたかい夜具をはねのけ、勢いよく起きあがって、電燈（でんとう）のスウィッチをひねった。その ⓐシュンカン、枕時計がジンジンと鳴りだした。きっかり起床時刻の五時半である。

いそいで、寝巻をジャンパーに着かえ、夜具を押し入れにしまいこむと、ぞんぶんに窓を（ア）あけた。風はなかったが、そとの空気が、針先を（イ）そろえたように、顔いっぱいにつきささった。

かれは、そのつめたい空気の針をなぎ払うように、ばたばたと部屋中にはたきを（ウ）かけはじめた。

次郎がはたきを（エ）かけおわり、箒（ほうき）をにぎるころになっても、ほかの部屋は、まだどこもひっそりと静まりかえっていて、板木の音だけが、いつまでも（オ）鳴りつづけていた。

かれは、むろん、そのことに気がついていた。しかし、べつに気をくさらしてはいなかった。毎回開塾の当初はそうだったし、時刻どおりに板木が鳴ることさえ珍しかったので、今朝の板木当番の正確さだけでも上できだぐらいに思っていたのである。

かれは、掃除をしながら、根気よく鳴りつづけている板木の音に、

ふと好奇心をそそられた。それは、鳴りはじめた時刻がきわめて正確だったからばかりでなく、その音の調子に何かしら落ちつきがあり、しかも、いつまでたってもそれが乱れなかったからであった。

（①最初の朝の板木の音が、こんなだったことは、これまでにまったくないことだ。だれだろう、今朝の当番は？）

板木を打っていたのは、はたして大河無門（おおかわむもん）だった。シャツにズボンだけしか身につけていず、足袋（たび）もはいていなかった。しかし、べつに寒そうなふうでもなく、両足をふんばり、頭から一尺ほどの高さの板木を、近眼鏡の奥から見つめて、いかにも念入りに、ゆっくりと槌（つち）をふるっていた。

次郎は、思いきりドアをあけ、

「おはようございます。」

とあいさつして、大河に近づいた。

大河は、その時、ちょうど槌をふりあげたところだったが、それを打ちおろしたあと、ちらと次郎のほうを見て、あいさつをかえした。

そして、そのまま、すこしも調子をかえないで、また槌をふるいつづけた。

「もういいでしょう。ずいぶんながいこと打ったんじゃありませんか。」

次郎が、寒そうに肩をすくめながら、言うと、

「　1　」

と、大河は槌をふるいながら、こたえた。

「しかしもう眼はさましていますよ。」

「　2　」

「きっとさましていますよ。どの室にも、眼をさましているものが、もう何人かはあるはずです。」

大河は、それでも同じ調子で打ちつづけながら、

「　3　」

「ええ、はじめのうちは、いつもこんなふうですよ。五分や七分はたいていおくれます。」

「　4　」

「そうかもしれません。しかし、それはやらないほうがいいでしょう。板木で起きる約束をしたんですから。」

「　5　」

「打ちやめると、それでかえって起きることもありますがね。」

「なるほど。……ふん。……そういうものですかね。……あるいはそうかもしれない。」

大河は、ひとりごとのように、そう言いながら、やはり打ちやめなかった。

次郎は大河の横顔を見つめて、ちょっとの間だまりこんでいたが、ふと、何か思いついたように、

「ちょっとぼくに打たしてみてください。」

大河は板木を打ちやめ、けげんそうに次郎のほうをふり向いて槌をわたした。次郎は、すぐ大河に代わって板木を打ちだしたが、その打ちかたは、一つ一つの音がⓑ余韻をひくいとまのないほど急調子で、いかにも［A］いるような乱暴さだった。

大河は、あきれたように、その手ぶりを見つめて立っていた。次郎は、しかし、それには気づかず、おなじ乱暴な調子で、つづけざまに三四十も打つと、急にぴたりと手をやすめた。そして、半ば笑いながら、言った。

「板木を打つのは、もうこれでおしまいにしましょう。これで起きなければ、ほっとくほうがいいんです。」

ところで、かれの言葉が終わるか終わらないうちに、二三の室か

ら、急にさわがしい人声や物音が、廊下をつたってきこえだした。
「起きだしたようです。もうだいじょうぶですよ。」
次郎は、そう言って、槌を柱にかけ、事務室のほうにかえりかけた。すると、その時まで眉根をよせるようにしてかれの顔を見つめていた大河が、急に、真赤な歯ぐきを見せ、にっと笑った。そして、
「なんだか、②ひどく叱りとばされて、やっと起きた、といったぐあいですね。」
「はっはっはっ。」
次郎はⓒユカイそうに笑って、事務室にはいり、すぐ掃除をはじめたが、その時になって、大河のにっと笑った顔と、そのあとで言った言葉とが、変に心にひっかかりだした。

〈略――塾長の朝倉先生が朝礼で今朝の板木の音について話している〉

やがて先生は言葉をついだ。
「君らの耳にあの音がどう響いたかは知らない。しかし、私は、あの音から、この塾はじまって以来のゆたかな感じをうけたのだ。じっくりと落ちついて、すこしも軽はずみなところのない、また、すこしも力んだところのない、おだやかな、そして辛抱づよい努力、――心の底に深い愛情をたたえた人だけに期待しうるような努力を、私はあの音から感じとり、これこそここの生活を象徴する響きだと思ったのである。」
朝倉先生は、そこでまた口をつぐんだ。塾生たちの中には、話がそれで終わったのかと思い、そっと眼をひらいて、先生の顔をのぞいて見たものもあった。
次郎は、しかし、それどころではなかった。かれは、もう、先生のつぎの言葉が、槍の穂先のような鋭さで、自分の胸にせまっているのを感じ、かたく観念の眼をとじていたのだった。

「ところで――」
と、先生は、かなり間をおいてから、つづけた。
「私は、率直に言うと、君らが私の期待を裏切らないだろうということについて、残念ながらまだ十分の自信を持つことができない。というのは、今朝の板木が、あまりにもながく鳴りつづけたからだ。あれほど辛抱づよく、しかも、あれほどおだやかに鳴りつづけたということは、一方では、あれを打っていた一人の塾生の心の深さを物語るが、また、一方では、その一人をのぞいた多数の塾生の心の浅さを物語ることにもなったのだ。君らの大多数は、板木を打った一人の塾生があれほどの誠意を示したにもかかわらず、③容易にそれにこたえようとはしなかった。」
次郎は、朝倉先生が、開塾最初の朝の訓話で、これほど激しい言葉をつかって、真正面から塾生たちに非難をあびせかけたのを、これまでにきいた覚えがなかった。かれは、まだあとに残されている自分への非難が、どんな言葉で表現されるかを、身がちぢまる思いで待っていた。
「君らのそうした非良心的な態度は、君ら自身をますます非良心的にするばかりではない。それがある限度をこすと、ついには、愛情と忍耐とをもって、君らの良心を力づけようと努力している人の心までをきずつけ、その愛情と忍耐とを、憎しみと怒りとに代えてしまうものだ。現に君らは、今朝の板木の音の調子が途中から変わったことで、それがわかっただろうと思う。あの、おだやかで辛抱づよかった板木の音が、おしまいになって、急に怒りだしたとしか思えないような乱調子になったが、あれは、君らのあまりにも非良心的な態度が、板木をうつ人の心をきずつけた証拠なのだ。……むろん、私は、愛情も忍耐心も失った、ああした乱暴な打ちかたを是認はしていない。また、それをやむを得ないことだとして弁護しよう

とも思っていない。怒りや短気は、友愛塾の精神とは根本的に相いれないものなのだから、どんな事情のもとでも、ああした打ちかたは、二度とくりかえされてはならないことなのだ。もし今朝の板木当番が、ついに［A］あんな打ちかたをしたとすると、私はその人のために、まことに残念なことだと思っている。しかし、いっそうわるいのは、ああした打ちかたを余儀なくさせた君らの態度だ。君らさえもう少し良心的であってくれたら、板木を打った人も、ああしたあやまちを犯さないですんだのだろうと思うと、それが私はくやしくてならない。……だが、それはまあいい、④それは百歩をゆずってあきらめるとしても、ここにどうしても私にあきらめのつかないことが一つある。それは、愛情で打たれた板木の音では寝床をはなれようとしなかった君らが、怒りで打たれた板木の音では、わけなくはね起きたということだ。その点で、君らは精神的にはまだ奴隷の域を一歩も脱していないということを証明している。いや、それどころか、君らはよりいっそうみじめな奴隷になることを希望しているとさえ私には思える。これはほんとうになさけないことだ。私は、むろん、こう言ったからといって、怒りに対しては怒りをもって立ち向かえ、と君らにすすめているのではない。ただ私は、〈　X　〉に対しては、つけあがり、〈　Y　〉に対しては、ただちに膝を屈するような君らの奴隷根性が、なさけなくて、じっとしてはいられない気持ちがするのだ――」

次郎は、先生の言葉がますます激しくなっていくのにおどろいた。しかし、かれにとっていっそう不安に感じられたのは、今朝の板木の打ちかたについて、大河無門が［B］ことであった。

（下村　湖人「次郎物語第五部」より一部改変）

問一　‖線ⓐ～ⓒについて、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二　〰線**ア**～**オ**の動詞のうちで、活用の種類が他と異なっているものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三　――線①「最初の朝の板木の音が、こんなだった」とありますが、どんなだったというのか、簡潔に二点答えなさい。

問四　「1」～「5」に入る会話文を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

あ　「いつもこんなに起きないんですか。」

い　「ええ、でも、まだだれも起きた様子がないんです。」

う　「じゃあ、やはり打ちつづけるよりほかありませんね。」

え　「すると、起こしてまわるほうが早いですかね。」

お　「そうでしょうか。」

問五　文中の［A］には同じ慣用句が入ります。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　臍（ほぞ）をかんで　　**い**　業（ごう）をにやして

う　満を持して　　**え**　襟（えり）を正して

問六　――線②「ひどく叱りとばされて、やっと起きた」とありますが、「叱りとばす」とは、ここでは、どういうことを意味していますか。具体的に答えなさい。

問七　――線③「容易にそれにこたえようとはしなかった」とありますが、具体的にはどのようなことを指しているのですか。説明しなさい。

問八　――線④「それ」とありますが、何を指しますか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

あ　板木当番以外の塾生たちが良心的ではなかったこと。

い　塾生たちの非良心的な態度が板木当番を苦しめたこと。

う　塾生たちの非良心的な態度が、板木当番をあやまちに追い込んだこと。

え　今朝の板木当番に、愛情と忍耐とが備わってはいるとはいえなかったこと。

問九〈　X　〉と〈　Y　〉にはそれぞれ二字の言葉が入ります。本文中から抜き出して答えなさい。

問十　B　に入る語句として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

あ　怒り心頭に発している

い　手放しで褒められている

う　揚げ足を取られている

え　ぬれぎぬを着せられている